

政府経済ミッ

痛感した

シヨン団同行の思い出と

インドネシアのお国事情

伊藤澄夫

伊藤製作所社長
中京大学特別栄誉客員教授

2017年1月に4カ国を歴訪した安倍晋三総理の経済ミシヨン団に同行し、フィリピンのマラカニアン宮殿、デュテルテ大統領の故郷ミンダナオ島のダバオ市を訪問したことは本誌12月号で述べた。

政府の一行はその後、忙しくオーストラリアへの訪問に向かい、別行動となった民間のわれわれと合流したのは2日後の夕刻、インドネシアの首都ジャカルタのホテルであった。そしてボゴール宮殿での晩餐会に参加できたことは私にとって大変光栄で、一生忘れることのできない時間だった。

インドネシア最大の都市でもあるジャカルタは常に交通渋滞が激しく、初めて訪問する外国人は驚きを隠せない。

過去にはタイのバンコクが世界一深刻な道路状況と言われていたが、その後、同市内の道路はスカイウェイや立体交差、道路も増え、今では極めてスムーズな交通事情になっている。一方、インドネシアでは年間150万台程度の車が販売されるようになったが、道路事

情は旧態依然のまま。計画的なインフラ事業がなされておらず、道路が混雑でどうしようもなくなくなつてから工事が始まり、それによつてますます深刻な渋滞が起きている。

当社は2013年にインドネシアに進出し、駐在員が会社から25キロのジャカルタ市内に住んでいるが、「どこかで工事が始まれば、帰宅に4時間要することも珍しくない」と言う。

そうした交通事情を大幅に改善しようとして、ジャカルターバンドン間の高速鉄道計画が6年前にスタートした。内示を受けた日本は5億円余りの費用をかけて地質やルート、需要の調査をしたが、いざ発注となる時期に、中国がその調査資料を不法に入手し、割安の見積もりや裏工作などで受注を横取りした。2019年完成と聞いていたが、いまだ用地の買収すら出来ないままである。

インドネシア人のほとんどが、「日本の新幹線に乗りたかった」「日本側は裏金を渡さなかったから受注できなかったのだろう」と今も言う。当社がこの地に進出するに

速道路を封鎖し、パトカーが先導してくれたおかげで、35分で到着できた。ただでさえ交通渋滞が慢性化しているジャカルタでの交通規制は、インドネシア国民にとっては大変迷惑なことだったろう。

夕刻前、安倍総理とジョコ・ウィドド大統領による首脳会談が行われ、続いて歴訪に参加した27人の民間人から7人が選ばれて、大統領閣下や大臣に発表の機会が与えられた。私が発表した内容を要約する。

「当社は2013年、当地の財閥であるメカル・アルマダ・ジャヤ社と合弁会社をブカシ市のタンブロンに設立しました。順送り金型製作を得意としていますが、この金型は精密な金属部品を高速かつ無人で打ち抜くことができます。

50年余り順送り金型製作に特化したことで、当社は無類の技術と経験を有しており、この技術を当地に移転したことで、すでに多くの日系の顧客から受注を頂いています。

インドネシアでは近年、自動車の生産が増加しています。年々賃

あたり、賄賂が横行しているとは聞いていたが、大いに納得の出来事だった。日本政府から厳しいクレームがついたとは聞いていないが、国民にバレバレである政府の良からぬ習慣は無くしていただきたい。

インドネシアではクルマの90%以上は日本車で、バイクは99%だ。過去に中国のメーカーがバイクの生産と販売を始め、価格の安さで一旦は良く売れた。しかし鉄道が発達していないこの国では、ラマダンなどの帰省に、遠距離でもバイクを使う。フルスロットルで何時間も走ることで、多くの中国製バイクのエンジンは焼き付いてしまったという。低価格だが低品質だとの評判が広がり、中国メーカーはすぐに撤退となった。以来、日本製のバイクの地位はますます高まったようだ。

インドネシアの課題

さて、そんな道路事情のジャカルタゆえに、私たちが泊まったホテルからボゴール宮殿までは通常2時間程度かかるが、その日は高

金が大きく上昇している昨今、品質とコストで競争力のある順送り金型を広めることで、インドネシア自動車産業の競争力向上に貢献したいと考えています」

驚いたことに、私の斜め左前に座っていた大統領と2人の大臣が静かに拍手してくれた。7人のスピーチが終わつてみると、拍手されたのはなぜか私だけ。どこに興味を持っていたのか知らなかったが、確認する機会は無かった。

インドネシアはアセアン諸国の中でも労働組合が最も強いといわれ、5年間で賃金が約2倍になったほどだ。インドネシア政府は毎年多額の昇給を期待していて、彼らは給与を上げれば先進国になれると思っているのだろうか――。しかしそれは国民に対するご機嫌取りにしか思えない。

同年10月、東京で開催された「インドネシア投資ビジネスフォーラム」で講演する機会をいただいた私は、インドネシア工業省の大臣に、「賃金を上げると同時に生産性を上げなくては、近隣の工業国に勝てない」と申し上げたが、既

いとう・すみお

1965年立命館大学経営学部を卒業後、伊藤製作所に入社。1986年同社代表取締役就任、現在に至る。順送り金型メーカーの老舗企業であり、国際競争力のある金型製造技術の確立に努め、無人化、高速化、精密化を追求したプレス加工で卓越した技術力を誇る。
(社)日本金型工業会・副会長・国際委員長を歴任。中京大学特別栄誉客員教授、国立ソウル科学技術大学校名誉教授、神戸大学非常勤講師を務めて後進の育成に寄与。
2017年4月春の叙勲「旭日単光章」受章。
著書に『モノづくりこそニッポンの磐石』『ニッポンのスゴい親父力経営』『日本製造業の後退は天下の一大事』がある。



に合理化が進んでいるタイと比較して、自国のクルマやバイクが割高であることを、インドネシアの経財省は認識している。
ジョコ大統領が私に拍手を送つたのは、日本の金型技術への期待だろうかと思像する。それは、あながち間違っていないと思う。